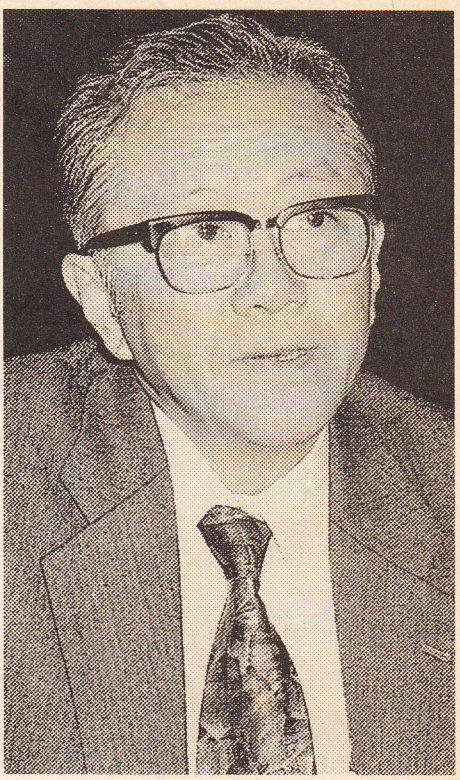
原子力の平和利用を推進する日本原子力産業会議（原産・向坊隆会長）が4月13日から3日間、広島市内で年次大会を開く。「核」に敏感な被爆地で、推進側があえて大会を開く狙いや意義は何なのか。大会を準備している森一久専務理事に聞いた。

（報道部・江種則貴）

日本原子力産業会議　広島で来月 大会

悲劇忘れて平和利用語れぬ

森 一久専務理事に聞く



「核兵器廃絶の方策を議論する大会にしたい」と話す森専務理事（広島市内のホテル）

もり・かずひさ　広島市出身。中区の幟町にあった自宅で被爆した。旧制広島高校を経て京都大理学部卒業後、1948年、中央公論社入社。科学ジャーナリストとして活躍した。56年、日本原子力産業会議創立とともに原産入り。78年から専務理事。68歳。

―なぜ被爆地ですか。

原子力の平和利用に携わる者は、広島の悲劇を忘れてはならない責務があると思う。被爆五十周年の区切りを控え、「ヒロシマを知らずして」と開催に踏み切りました。人類が核の平和利用による利益を受けようとする時、核兵器の存在は矛盾でしかない。だが、最近は核兵器廃絶に向けての世界情勢が整ってきた。その点も背景にあります。

―軍事利用と平和利用は違う、と言うのですね。

大会では、核兵器廃絶の方策をきっちり議論するセッション（討論）を設ける。原爆慰霊碑の前でも恥ずかしくない大会になると思います。

―広島の原発反対派は「平和利用推進にヒロシマの名が利用される」と開催に反対しています。

こて先の方便で原子力利用が進められるとは、考えていません。どんな人も犠牲にしないよう、きちんと（安全性などの技術確立を）しなければならない。科学は間違わずに使わなければならないし、反科学的な精神に陥ってはいけない。むろん、被爆地での開催を、反対派の方の説得材料にしようなどという気持ちは一切ありません。

核兵器廃絶策 みっちり議論

―平和利用でも核汚染の危険はぬぐえません。しかし、大会プログラムには平和利用の安全性についての論議が見当たりません。

安全性をテーマにしたセッションも考えたが、「日本の技術は世界一安全だ」という論議になってしまいがち。あまり宣伝になってはいけないと、やらないことにしました。

―プルトニウム利用を進める日本に対し、海外などから「核武装をするのではないか」という懸念が出されています。

非核三原則があります。日本が核兵器開発を言い始めたら、国民が納得するとは思えないし、原発も止まってしまうだろう。核拡散防止条約（NPT）の無期限無条件延長を、日本が支持するのは納得できません。大国の核兵器保有を認めていて、決して核兵器禁止条約ではないからです。ただ、日本の核利用について、さらに透明にしなければならないと感じています。

―森さんは広島の被爆者だと聞きました。

被爆者であるのが、自分の言行に対する外部からの批判を和らげ、自分の甘えにつながってはならないと戒め、あまり口に出さないようにしてきました。実は、両親ら家族五人を失い、自分も三カ月間寝込んだ。以来ずっと、ヒロシマは自分の中で生きていると思っています。家族の五十回忌法要も済ませ、個人的にも区切りの年の大会になります。